

「希望」研究で見つけた光

釜石に気概あり

お酒が好きな私は釜石市に行きたびびり、いつも飲みすぎしてしまう。食べものももちろんおいしいが、なんといっても地元の人たちがいい。

東京大学社会科学研究所では、希望と社会の関係を考える希望学という新たな研究を二〇〇五年から始めた。生活、経済、歴史、文

寄稿

化などさまざまな面から希望を調べるのにさざわしい地域を求め、〇六年一月、私たちは釜石を訪れた。そのときの印象を、同僚の宇野重規君はなんだかいつも笑っていたとメモに書いた。地元岩手の記者Fさんも釜石に赴任してから当地を離れるまで「二二」で嫌な

玄田 有史氏

東京大教授

思いをしたことが一度もなかった」と言った。

今の季節なら、釜石線や新しく開通した道路で仙人峠を越えるとき、すがすがしい新緑が迎えてくれる。ただ、外から訪れた人にとって実に居心地のよいこの街も、生活する人には、楽

しいことばかりでない。若者が減っていく。学校は少

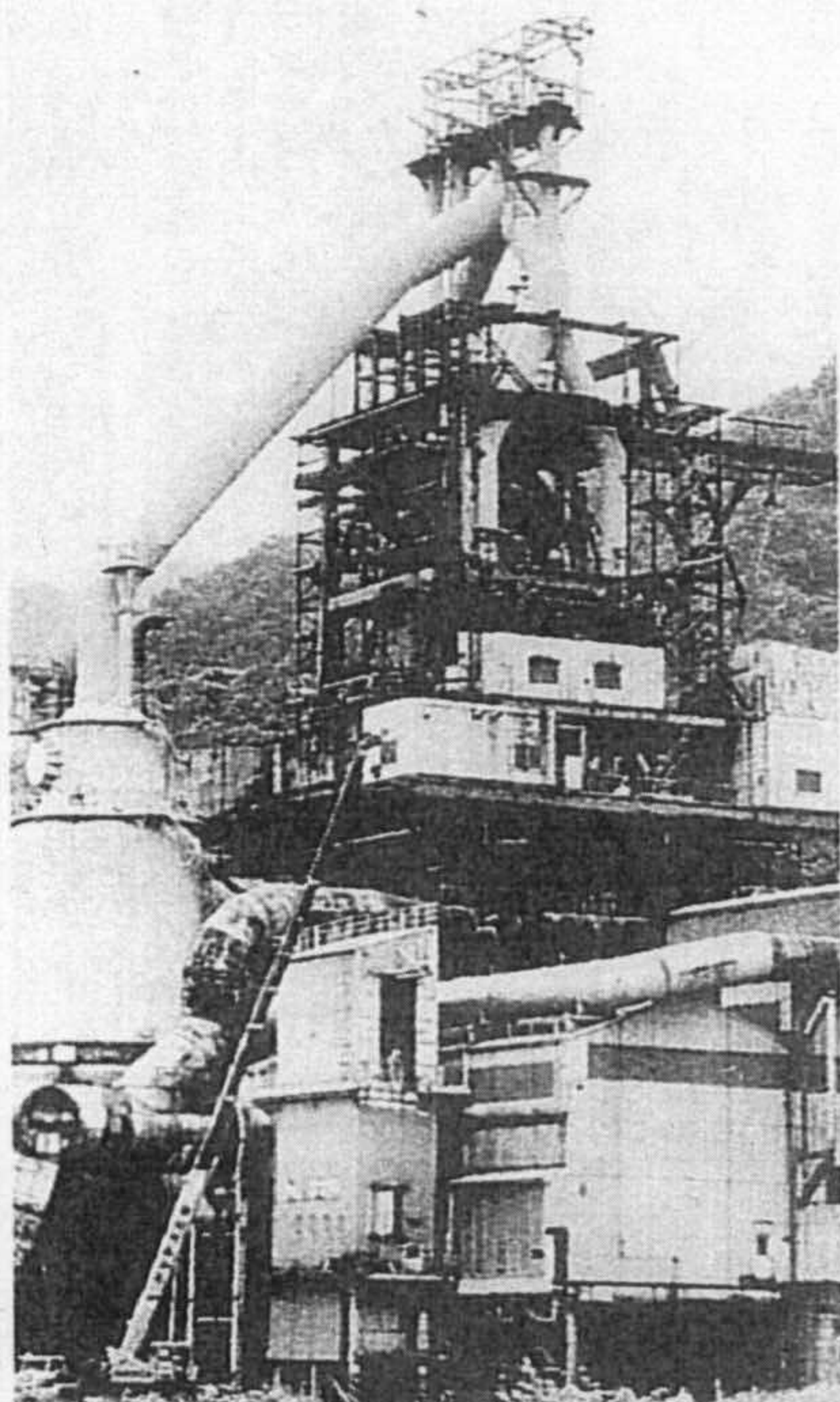
地域振興に市民熱意

ななくなる。仕事先もなかなか増えない。高校生は遊ぶところがなくなってしまわないと言っている。高齢社会への対応でも幼稚園を絶対に一つだけを残したい。地元の天



げんだ・ゆうじ 東大社会科学研究所教授(労働経済学)。1964年島根県生まれ。東大経済学部卒。学習院大教授などを経て現職。著書に「仕事のなかの曖昧な不安」など。

釜石は、製鉄合理化による不況に限らず、艦砲射撃や津波など、歴史的にも多くの失望を経験してきた。かつては地方の希望の星だった華々しい記憶を持つだけに、かえって現状や将来



釜石のシンボルだった新日本製鉄釜石製鉄所第1高炉。1996年の解体作業で姿を消した

高炉休止、災害乗り越え

の見通しを色濃く暗いものに感じさせたりもする。

しかし失望は決して悪いことばかりではない。失望自体は辛いものだが半面、失望を経験して初めてわかることもある。そんな失望を乗り越えて得た希望こそ

本望の希望である。多くの苦しい出来事を経験してきた人に特有の明快さや潔さを、釜石で出会った多くの

方々から感じ、私たちは元気をいただいた。希望学では〇六年一年間のなかから生まれたい。大事なことは、どんな出会いを大切に育ててゆ

人近くの方々のお話を耳を聞き続けることである。

澄ました。今年三月には報告会を開き、市民会館の会場がいっぱいになるほどの市民の方々にお集まりいただき、釜石の希望を考えた。大切なのは誰かに期待するだけであらう、自分も期待されている存在で、一人一人が自覚し、自分ができることを地道に続けることだ。そこに希望の輪は広がっていく。

その輪のなかで、釜石にあって、過去から未来に渡る「誇り」とは何かを、皆が共有する。そしてその誇りだけは、どんなことがあっても失わないという志を持ち続けることだ。その大切さは、どの地域も同じだろう。

報告会で地域振興にも詳しい経営史研究者である橋川武郎氏は「釜石の希望に希望はある。でも、もっとあるはずだ」と、語った。「希望が点在していて、まだつながっていない」とも。希望は、人と人との関係のなかからしか生まれたい。出会いを偶然だつたように感じる。これからの

希望は、人と人との関係のなかからしか生まれたい。出会いを偶然だつたように感じる。これからの希望は、人と人との関係のなかからしか生まれたい。出会いを大切に育ててゆきたいと思っている。

文化の泉